

我が校の生徒会はおかしい。絶対におかしい。他に類を見ない程の変人率。何故、このメンバーが同時期に生徒会役員になってしまったのか。そもそも、何故、このメンバーが生徒会役員になったのか。そこから謎だ。そんな変人役員に囲まれた俺は人一倍大変だ。おそらく、この学校一大変なポジションにいるだろう。



「次の会報で何か載せる事ってある？」

会長である水城先輩がペンを回しながら言っている。

「会報ねえ。最近は特に目立った活動もしてないからねえ」

会計である宝生が椅子の背もたれに体重を掛けながら、伸びをして言っている。

「そうですね。正直、何も載せる事無いですよ」

書記である後輩の東雲も半ば諦めながら、頬杖をつけて言っている。

「いや、そんな事よりも——」

「いっそのことある事無い事、載せてやろうかしら」

「流石にそれは怒られるって」

「この前も怒られたばかりですからね。ちよつとインターバルが短い気がしますよね」

「そうなのよね。そうなると、本当に書く事がないわ……」

頭を抱えて本気で悩みだした会長。しかし、俺はそんな会長の思案を遮った。

「ちよつと！ 今はそんなこと考えてる場合じゃないでしょ!？」

「……もう、何よ」

鬱陶しそうに俺の見てくる会長。俺ってそんなに悪いことしたのかな？

「今は文化祭の出し物を決めなくちゃいけないですよ！ というか、会報は文化祭後だから、文化祭の事を載せれば問題ないです！」

「そうですね。もうすぐ文化祭ね……」

会長がまたも憂鬱そうに言いだした。

「そうだね。もうすぐだねえ」

それにご同調するように宝生が口にした。

「時間が無いですねえ」

更に東雲も口にする。

「いや、ちよつと——」

副会長である俺は三人のだらけきっている姿を見ながら困惑していた。もうすぐ文化祭だと言うのに、なんとだらけきっているのか。本来だったら忙しく動き回っているはずなのに、机に突っ伏しながら話しあっている。

「生徒会の出し物は何にするの？」

「そうですねえ………。何か良いのある？」

会長は少しだけ考えた結果、放り投げた。もう考える事自体が面倒くさいと言いつつ、霧囲気だ。

「もう今からじゃ場所も取れませんからねえ」

三人がダラダラ話し合う姿を見ている俺はもう我慢の限界だった。そして、ついに、「うおおおい!!」

俺の大声に驚いた三人が一斉に飛び上がる。何事かと俺の方に視線を向け、

「何事?」

そのまま口にしてきた。

「何だこれ!? 何なんだこれ!? これ会議だよね!? 『文化祭だりい』とか言ってる人達の会話じゃないよね!」

「たっちゃん、どうしたのさ、突然」

「いや、あまりにもだらけきっているから、つい……」

三人があまりにも驚いていたから、少しだけ罪悪感に苛まれた。

「まったく、驚かせないでよ」

そう言いながら会長はまたも机に突っ伏してしまった。

「はい、すいません。——おい、待てええい!!」

「だから、何よ!」

「ちゃんと会議をやれえ! このままじゃいつまで経っても終わらねえぞ!」

天に向かって叫ぶ俺の姿を見て悟ったのか、三人は少しだけ姿勢を正してくれた。

「仕方ないわねえ。少しはちゃんとやってあげるわよ。ただし、決める事には文句言わないでよ。さもないと——」

「ホッチキスで口を塞ぎますよっ」

会長のセリフを横取りして、すさまじく恐ろしい事をサラリと言う東雲。こんな後輩いで良いのかよ。

「よーしつ、ホッチキス準備い!」

「必要ねえよ!」

本気でホッチキスを準備しようとする宝生を無理矢理椅子に座らせる。こいつらがどこまで本気なのかまったく分からない。

「ほら、龍宮、いつまでバカやってるの? さっさと座りなさい。会議が始まらないですよ」

いつの間にか立っていた俺だけが悪者になっていた。おかしい。正義はこちらにあったはずなのに、おかしい。

「それで、生徒会の出し物だけど、何か良い案はある?」

ようやく、まともな会議が始まった事で俺は少しだけ安堵した。後はこれでとんでもなくぶっ飛んだ企画が出なければ完璧だ。しかし、それは無理な相談だろう。

「はいはい、たっちゃんが脱ぐ!」

「はーい、龍宮先輩が消える！」

「はーい、龍宮が燃える！」

「はーい、お前ら落ち着けえ！」

ダメだ。まったく真面目に会議をする気が無いらしい。

「何よ、口を出さないって約束でしょ？」

「そうだそうだ！ 何か文句あるのかー!？」

「あるから口を出してるんだよ！」

宝生と言いつ合っている横で東雲が両手にホッチキスを持って笑顔でカチャカチャやっていた。怖ええよ。

「もつとあるでしょ。こう、屋台とかバンドとか劇とか」

文化祭の出し物の定番と言えば、屋台、バンド、劇、そしてお化け屋敷が挙げられると思う。どの学校の文化祭でもこの四つは大体ある気がする。

「全部却下」

「なっ!？」

俺の案を全て却下してきた会長。そこまでバツサリ切られるとこっちもショックを隠しきれない。

「もう場所が取れないのよ。やる場所が無いわ」

「そうですよ。まったく……」

「一体、誰の所為でこんな事になったんだか……」

全員が一斉に俺を見る。まるで俺が悪いみたいな空気だ。

「いや、俺じゃねえよ！ お前らが色んな理由を作って、会議を延期してきた結果だろうがっ!」

俺は前々から会議をやるうとしていたが、この三人が団結して会議を回避し続けていた所為で、文化祭直前になっても場所はおろか出し物まで決まっていない状況なんだ。

「まあ、過去の事は水に流してあげるわよ。それよりも今は出し物を決めるのが先決よ」

ちくしょう。どう足掻いても俺の責任みたいな事になってやがる。多勢に無勢とはまさにこの事だ。

「で、本当に何か無い？」

「そうですねえ。場所も無い訳ですから、屋台とかの店じゃなくてイベント形式が良いじゃないんですか？」

「イベントねえ……そうだ！ いっその事、ミスコンを生徒会主催って事にしちゃえば良いんじゃない!？」

名案、とばかりに宝生が言っていた。

ミスコンは毎年、開催される文化祭のメインイベントだ。規模の大きな文化祭ならある所にはあるイベントだ。

「それよ！ あれって実行委員会が主催だったわね。乗っ取ってくるわ！」

宝生の案を即決で採用した会長は椅子から飛び上がり、生徒会室を出ていった。

「えっ!? ちょっと!」

俺の制止なんて無視して会長は文化祭実行委員会の本部に駆けて行ってしまった。

「おい、どうすんだよ……」

「別にいいんじゃない?」

「そうですよ。わざわざ一から企画を考える必要はありませんよ」

こいつら性根が腐ってやがる。いくら考えるのが面倒だからって、他所から奪ってくるのはダメだろ。

十分程すると会長が生徒会室に戻ってきた。その顔は少しだけ不機嫌そうだった。

「ダメだったわ」

「当たり前ですよ」

意味が分からないと聞こえてきそうな口ぶりだった。俺からしてみたら、会長がその意見が通ると思っていた事の方が意味が分からない。

「今年の実行委員会は器が小さすぎるわ!」

「ホントだよ」

当然の結果なのに宝生までもが勝手な事を言っている。

「ほら、だから、自分たちで考えましょうよ」

「え、ダルスい」

遂に言っちゃったよ。今まで口には出しておかなかったけど、遂に本音が出ちゃったよ。

うなだれる三人を促して、何とか会議を再開する。しかし、

「もういいわ。こうなったら、今までの活動記録を展示しましょう」

最終案が出てきてしまった。展示物は準備をするだけで、当日は一日自由になる。本当に何も案が出てこないか、文化祭を遊び尽くしたい団体がやるのが展示だ。

「そうですよ。今までの記録なら準備は楽ですし!」

「よし、けつてーい!」

会長の最終案は宝生と東雲にすぐさま受け入れられ、生徒会の出し物は決まった。しかし、俺はあまり納得していなかった。折角の文化祭なんだから何かちゃんとした出し物があったいからだ。やっぱり、文化祭は準備も楽しい。今までの活動記録の展示では準備もほとんど無い様なものだ。

「会長、本当に良いんですか?」

「仕方ないでしょ、今のところやりたい事が無いんだから。早く出し物を決めないと実行委員会がうるさいしね。さっきも散々言われたわ」

「でも——」

「大丈夫よ。当日までにやりたい事が見つかったら、そっちをやるわ」

文化祭では事前に各団体が何をやるかを申請する。その為、直前になっての変更は基本

的には認められない。当然、会長もその事は十分に分かっているはずだ。

「じゃあ、各自やりたい事が見つかったら報告してね」

半ば強制的に会議は打ち切られた。



我が校の敷地面積は広く、全校生徒を千人近く有するマンモス校だ。南にある正門から敷地に入ると、正面には横に長方形をした本校舎が堂々と佇んでいる。その本校舎の東には部室棟、西には役員棟（各委員会の部屋があり、生徒会室もここにある）がある。どちらも、南から北に伸びた長方形の形をしている。本校舎の反対側には体育館があり、これらの建物に囲われる様に広々としたグラウンドが広がっている。

そんな学校の文化祭は高校の文化祭の域を超えた規模で、とても華やかだ。来場者も多く、学校がある市を代表するイベントになっている。

そんな超高校規模の文化祭を執り行うのが文化祭実行委員会と我が生徒会だ。しかし、今期の我が校の生徒会は酷い。ハッキリ言って酷過ぎる。もしかしたら、他の学校の生徒会もこうなんじゃないかと思つた事もあったが、断じてそんな事は有り得ない。

まずは会長だ。水城先輩。知的な雰囲気が高い、ショートカットがよく似合っている人だ。頭脳明晰と言う言葉もよく似合う。しかし、変人だ。

俺と同学年で会計を担当する宝生だ。ウェーブ掛かった長髪がどこかのお嬢様の様な雰囲気と漂わせる。容姿端麗という言葉がよく似合う。しかし、変人だ。

もう一人は先輩で書記を担当する東雲だ。ツインテールで実に女の子らしい容姿をしている。天真爛漫と言う言葉がよく似合う。しかし、変人だ。

そんな三人のストッパー役が俺、副会長の龍宮だ。俺は普通だ。どこにでもいる様な生徒会役員だ。周りが異常なだけで俺は至って普通。しかし、唯一の常識人なので色々と大変だ。変人会長と変人会計と変人書記の暴走の後片付けをしなくちゃいけない。



生徒会の出し物が決まって、俺は生徒会に顔を出す機会が減った。出し物が今までの活動記録の展示と言う事もあって、準備はすぐに終わってしまった。少しでも物足りない気もするが、その分、クラスの準備に力を入れる事にした。文化祭での生徒会の仕事はあったが、そっちは会長がやってくれると言っていたので、少しでも嫌な予感があったが、任せられる事にした。どうせ、問題が起こったら呼び出されるんだから、今の内にクラスに貢献しておかなくちゃいけない。

「龍宮君、ちょっと——」

クラスメートの一人が俺を呼んでいた。

クラスメートの咲葉。高校に入って何かと縁のある女子だ。一年二年と同じクラスになり、それなりに話す。クラスの女子の仲では最も仲が良い存在だ。

「教室と教室を繋ぐ通路のことなんだけど……」

俺のクラスはお化け屋敷をやることになっている。その準備で俺は内装、咲葉は予算の担当になっていた。咲葉はクラス全体の予算を任されているため、一番費用がかかる内装にほとんど付きっ切りだ。内装を仕切る俺とは必然的に接する機会が多くなる。

「なあなあ、龍宮くん。こっちはどうすんだあい？」

俺と咲葉が話していると別の所からも声が掛った。俺と同じ内装担当の三雲だ。どうやら、俺と咲葉が仲良くしているのが気に食わないらしい。しかし、別に俺と三雲は仲が悪いわけではない。むしろ、クラスで一番仲が良いといっても過言ではない。

「なんだよ、うるせえな。邪魔すんな」

三雲が咲葉を意識しているのは俺も知っていることだから、俺は咲葉と仲が良い事を利用して、三雲をよくからかっている。

「はあ!? 邪魔してねえよ。むしろお前が邪魔だね!」

「あゝあゝ、嫉妬かよ。醜いねえ」

「はっ! どころ嫉妬してるんだよ。ただ、お前に殺意を抱いてるだけだよ!」

それは嫉妬というんじゃないか?

三雲は俺がいなくなるように本気で思っていそうだった。

「ちよつと二人とも……また喧嘩?」

俺と三雲の意味も無いがみ合い、じゃれ合いを咲葉が本気で心配していた。別にそんな心配される必要もないんだけどな。いつもの事だし。

「そんな事ないよ! 俺たちはすげえ仲良いからね!」

三雲が俺と肩を組んで言っている。本当に咲葉の前だと良い人振るな、こいつは。

「いいや、超仲が悪いね。犬猿の仲ってやつだな。俺はこいつを殺したいと思ってる」

俺は組まれた肩を振り解いて言ってやった。

三雲が咲葉の前で良い人振るなら、俺は三雲の真逆の行動をしてやるまでだ。

「ありえなくね!? 俺はこんなに好意的にしてるのに、それを突きはねちゃいけないですよ!」

「あゝはいはい。もうどっちでも良いから、飲み物買ってきて。休憩用に必要だから」

俺と三雲の言い合いを見かねた咲葉が言ってきた。実に心配りが出来る奴だと思ったが、もうちよつと空気を呼んで欲しかった。別に俺たちは本気で言い合っているわけじゃない。

「お前行けよ! 俺は絶対に行かねえからな! お前のパシリなんて死んでもやだね!」

本気で言い合っているわけじゃないぞ? ……少なくとも俺はね。

仕方なく俺は買い出しに出た。あまりにも三雲が必死だったから可哀そうになってしまったからだ。俺がいなくなった事で咲葉と少しでも話が出来るようになっただろ。

俺は学校の近くのスーパーで飲み物とお菓子を買いこんでいた。

文化祭の準備は普段の下校時間よりも遅く学校に残る事が多い。まあ、それが文化祭の醍醐味でもある。その為、小腹が空く事だってある。そんな時にちょっとしたお菓子なんかがあると、そりゃあもうみんなのテンションは鰻登りだ。

スーパーの棚でどのお菓子を買うか悩んでいると、俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「あれ？ 兄ちゃん、何やってんのさ」

声がる方に顔を向けると、そこには妹の美月がいた。

「おう。買い出しだよ。お菓子と飲み物をな」

「なるほど。パシリだね」

俺と美月は一歳差で、美月も俺と同じ学校に通っている。

「パシリのつもりは無いけど、そういうことだな。お前は何してんだ？」

「はっはっは。私もパシリなのだよ！」

「お前もかよ……」

「兄妹揃ってパシリって……」

なぜか二人してお菓子の棚の前で気分が落ち込んでしまった。さっさと買って戻ろう。

俺は適当にカゴにお菓子と飲み物を放り込んでレジに向かおうとした。

「ちょっと待ってよ！」

しかし、その姿を見ていた美月が俺の進行を妨害してきた。

「なんだよ」

「私を買うの待っててよ」

「……なぜ？」

「特に意味はないよ。でも、ここで別れる意味もないでしょ？」

確かに美月の言うとおり、待つ意味もないし、別れる意味も……無いか？ 俺は早く戻

りたいんだが……

美月は急いでお菓子と飲み物をカゴに入れて俺の後についてきた。

一緒にレジに並んでいた時だった。俺が自分のカゴを台に乗せると、美月もカゴを台に

乗せてきた。そして、

「一緒にお願いします！」

「……え？」

レジのおばさんは美月に言われた通り、二つのカゴを一緒に清算していた。そして、代

金を告げてくる。

「え!? おかしくね？」

「いやいや、そんな事はないよ。それにこれぐらいなんとかなるでしょ？ 生徒会副会長

さん！」

なるほど。これが目的だったのか。

「いや、なんとかならぬだろ！ なんて説明すんだよ!？」

『ある女に貰いじゃった。てへっ』ってさ」

「いや、間違いじゃねえけど、間違いだろ！」

レジ前で騒いでいたせいでどんどんレジが混んできてしまった。それに気付いた俺は一刻も早くこの場から離れたくて、仕方なく清算を纏めてしてしまった。

「おかしい。絶対におかしい」

スーパ―からの帰り道、俺は呟いていた。

「おかしくないって。権力は振るう為にあるんだよ」

一体、どこでそんな言葉を知ってしまったんだ、この妹は……

「そういや、お前のクラスは何やるんだ？」

嫌な気持ちを払拭する為に俺は話題を切り換えた。

「うちは演劇だよ。オペラ座の怪人だよ」

「中々、すごい演目だな」

高校の文化祭、しかもクラスの出し物でオペラ座の怪人は中々無い選択だと思う。なんというか、もっとコメディ調の物を選びそうなものだけだな。

「ちなみに私は小道具だよ。本当はオペラ座の怪人がやりたかったんだけどねえ」

「え？ 怪人って男じゃなかったか？」

「そうだよ。いや、でもあえて怪人が女というのも面白いかと思ったんだけどね。賛同者がいなかったよ」

そりゃそうだ。なんでそんな冒険しなくちゃいけないんだ。

「仕方ないから、小道具でしのちゃんと色々ギミック付きの物を製作中！ ちなみに今は紐を引っ張るとネットが飛び出る小道具を作ってるよ！」

親指を立てて言ってくる美月の顔は満面の笑みだった。こいつは何やってるんだよ。まったく劇とか関係ねえだろ。それに、すでに似た様な物が製品化されてるだろ。

ちなみに、しのちゃんとは生徒会書記の東雲の事だ。美月と東雲は同じクラスで仲の良い友達だ。まあ、東雲が生徒会に入ってから仲良くなったらしいけどな。お互いに俺という共通の話題があって打ち解けたらしい。勝手に俺を話題にしてほしくはなかったけどな。

「兄ちゃんのクラスはお化け屋敷だったよね。教室、四つも使って」

「ん？ ああ。よく知ってるな」

「そりゃあ、話題になってるからね。教室四つ使うのは初めてらしいよ」

そうだったのか。そりゃあ話題にもなるか。

「まあ、当日、見に来てよ。私の小道具が火を噴くよ！ 私も行くからねえ」

そう言いながら、美月は自分のクラスに戻って行った。

火を噴くって……比喩なんだろうけど、あいつを言うとな当に火が噴くかもしれないと思えてしまうな。悲劇が喜劇に変わってしまうかもしれないな。

俺が教室に戻ると、腹をすかせた亡者どもが群がってきた。

「ほら、色々買ってきたぞ」

袋を机の上に置くと、クラスの連中が一斉に手を出していた。そんなに腹減ってたのかよ。

「御苦労さま。じゃあ、領収書を頂戴」

買い出しの費用も全てクラスの予算内で賄うことになっている。それは分かっている。買い出しに行く前に領収書をもらってくるように言われてたしな。

しかし、領収書を見せるのはとても躊躇われた。なんたって、領収書の金額と袋の中身が合わないからだ。

「どうしたの？　もしかして領収書、忘れたの？」

「いや、そんな事は無いんだけどな……」

「じゃあ、早く出して。じゃないとお金戻ってこないよ」

もういつそ金は諦めるか。そんな選択も出てきた。しかし、俺は領収書を咲葉に見せた。

「えーっと、なんかやたら高くない？　二倍ぐらい高いんだけど……」

どうする？　何か良い言い訳はないか？　えーっと……あつ、そうだ。

「ある女に買いじゃった。てへっ」

美月に言われた通りに言ってみた。

「……………」

咲葉が無表情で俺を見てくる。

まずい。怒っているのか呆れているのかも分からない。

「えーっと、どういうこと？」

「まあ、なんていうか、野良犬に噛まれたと思ってくれれば……」

「何言ってるの？　そんな事で納得すると思ってるの!?　駄目に決まってるでしょ!」

咲葉が大声を出して俺を咎め出した。その光景にクラスの連中が暖かい目を向けていた。

あのバカ、何かやらかしたな。あゝあゝ、知らね。咲葉が切れたら止まらないからな

あ。

そんな声が聞こえてくる。薄情な奴らだと思ったが、俺がもしもあいつらの立場だったら同じことをしているだろうから、何も言えなかった。

「なんで倍の値段してるの!?　どう考えてもおかしいでしょ!　それとも余程、正当な理由があるの!?　無いよねえ?　ねえ、無いでしょ!」

咲葉の激昂は止まらなかった。気づけば、さっきまで食料にありついていたクラスの連中はすでに自分の持ち場に戻っていた。あいつら……

「こんな領収書は認めないよ!　お金は龍宮君が全て払ってよ!」

「いや、流石にそれは……むしろ責任は美月にあるんだし……」

「え?　まさか、美月ちゃんのクラスの分が混ざってるの?」

少しだけ落ち着きを取り戻したのか、咲葉の声のボリュームは大分小さくなっていった。

「あ、ああ、スパーで会ってな。それで成り行きで……」

「へ、へえ、そうなんだ。それですぐに言わなかったんだねえ。庇ってたんだね」

咲葉の顔は笑顔だった。しかし、声色はどう考えても怒っていた。

「……………この、シスコンツ!!」

大声でそう言った咲葉は怒りながら教室を出て行った。

ちくしょう。なんで俺がシスコン扱いされなくちゃいけないんだ……

「いや、災難だったな」

咲葉が出て行った事を見て、三雲が近寄ってきた。さっきまで傍観を決め込んでいたクラスメイトも集まってきた。

「まあ、天災だと思っただな。あれは人の力じゃどうにもならないな」

三雲が勝手な事を言っている。しかし、俺もそれには同意だ。咲葉は少しだけ怒りっぽい。普段は実に良い奴なんだが、ちゃんとしていない事があると徹底的にやるし、真面目じゃない奴がいればしっかりと注意する。根が真面目なんだと思う。しかし、咲葉は正しい事を言っている訳だから、俺たちは誰も咲葉を疎ましく思ったりはしていない。でも、シスコンは止めてほしい。

「それに今も先生の所に行ったんじゃないか？」

機嫌を損ねて出て行ったようにも見えたが、おそらく三雲の言う通り先生の所に行ったんだろう。別に告げ口をする為に行った訳ではなく、相談に行ったんだと思う。咲葉は怒るだけ怒るとその後、なんとかしてくれる。実に良い奴だ。



文化祭当日。俺は生徒会に少しだけ顔を出して、すぐにクラスに戻った。生徒会の展示は出入り自由にしてあるから、誰かが常にそこにいる必要はない。俺も生徒会そっちのけでクラスの出し物に集中していた。

文化祭が最も盛り上がる昼ごろ。俺は美月のクラスを観る為に体育館に向かっていった。そんな時、突然、校内に放送が流れた。

『あーっ、あーっ。ちゃんと流れてるかしら』

スピーカーから聞こえてきた声に校内中の人たちが注目する。もちろん、俺も注目した。なんせ、スピーカーからの声は会長の物だったからだ。

生徒会役員である俺はこの放送については何も知らなかった。しかし、会長が放送するという事は生徒会関係である事が大いに考えられる。少しだけ不安が募った。

『これより、生徒会主催、鬼探しを開催いたします!』

——ヤバイ!

直感的にそう感じた俺は放送室に向かった。

文化祭の出し物を決めた時、会長は何かやりたいものが見つかれば、そちらをやると言っていた。しかし、文化祭当日になっても何も言われていなかったから、何も企画されな

かったと思いい込んでいた。まさか、俺に秘密にするとは思ってもいなかった。この分だと、実行委員会にも事前には言っていないだろう。面倒なことになる前に止めた方が良さそうだ。

『ルールは簡単。校内にいる鬼を探し出し、生徒会室まで連れてくる。なんとこれだけ！そして、連れてきた方には賞金一万円を進呈！』

会長の声が学校中に響き渡ると同時に所々で歓声が上がった。賞金一万円と聞いて、みんなやる気を出してしまったのかもしれない。

俺は放送室に着くと、勢いよくドアを開けた。

「ちょっと！ 何やってるんですか!？」

放送室には俺を除いた生徒会役員の三人がいた。会長が校内放送用のマイクの前に鎮座し、奥の校内テレビ用のブースには俺の顔写真が大きくプリントされた紙を持った東雲がいた。そして、俺を抑えてくる宝生。

「まあまあ、もうすぐ放送は終わるんだしさ」

「いやいや！ そういう問題じゃねえだろっ！ 勝手にこんなことしたらヤバいだろ!」

宝生に抑えられるが、少しずつ部屋の奥に進んでいく。

「それにこんなところにいる良いの？」

「は？ どういうことだよ……」

「いやあ、もうすぐわかるよ」

宝生が意味深な笑みを浮かべて言ってくる。

「それでは、鬼役を發表します！ 各教室のテレビの電源を入れてください」

東雲のいるブースの様子は校内テレビとして各教室に流すことが出来る。そして、そんな東雲の手には俺の顔写真がデカデカとプリントされた紙。

俺は嫌な気がした。どうしようも無く嫌な予感が。おそらく、俺の想像通りの事が発表されるだろう。

「鬼役は、二年一組の龍宮君でえす!」

校内テレビには俺の顔がドアップで映し出された。校内にいる全員が嫌でも俺の顔を認識してしまう。

「それではこれより、生徒会主催鬼探しを開催しまゝす!」

マイクに向かって声高らかに開催宣言をした会長。既にやりきった顔をしていた。

「ちょっと！ ええ!! ちょっと!!」

事態に全く付いていけていなかった俺は声を荒げて喚き散らしていた。しかし、それも会長たちに窘められてしまう。

「こんな所について良いの？ さっき、あんたの声も校内に流れちゃったから、おそらく、あんたを知ってる人間ならあんたがここにいる事に気づいたわよ。早く逃げないと捕まるわよ。そしたら、諭吉さんが、フライアウェイ!」

手で空を切る様なジェスチャーをしながら言ってくる。しかし、俺はそこまで危機感が

無かった。賞金の一万円は生徒会に割り振られた文化祭の予算だろうからな。

「いや、一万円が無くなるのが、俺には関係な——」

俺が言いかけた瞬間、校内テレビのブースにいる東雲がポケットから財布を取り出した。実に見覚えのある財布だ。今朝、家を出る時に鞆に詰め込んだ覚えのある物だ。

「ちなみに、生徒会の予算に一万円なんて余裕は無いので、ある人物のポケットマネーから賞金が出されるので、あしからず」

生徒会の会計である宝生が言ってくる。

「はああ!? あれ、俺のしろ! お前らいつの間にとったんだよ!」

東雲が財布を開いて、中から一万円を取り出し、手で仰いでいる。

賞金が一万円なんていう微妙な安さにはこんな訳があったのか。文化祭の打ち上げがあるだろうからって多めに金を入れてきたのが仇になっちまったよ!

「あしからずう、あしからずう」

会長と東雲がそう言いながら小躍りしていた。ちくしょう、今までに無い以上に腹が立ってきたぞ。絶対に悪いと思ってるねえだろ!

「ああー! お前ら、金返せえ!!」

宝生の制止を振りほどきに掛かった時だった。放送室に最も近い階段から、大きな足音が聞こえてきた。全力で階段を駆け上がってきているようだ。数は一人分だ。

「龍宮ああああ!!」

「三雲かっ!」

怒号と共に階段を駆け上がってくる三雲。それを聞いた瞬間、とてつもない不安感と焦燥感に襲われた。あいつ、本気だ。

「ほら、さっそく来たわよ。さっさと逃げた方が良くんじゃない?」

完全に他人事の様な口ぶりで会長が俺に逃げる様に促してくる。

今すぐ財布と金を取り返したいけど、ここで捕まったら、冗談でした、じゃ済まされねえぞ! とりあえず、今は逃げる事が先決かっ!

どんな言い訳をしても、一万円を失いそうだった俺は、すぐさま放送室から飛び出し、怒号とは別方向に走り出した。

「絶対に返してもらうからなっ!」

そう言っただけで放送室を後にした。

よし、まずは後ろの三雲をどうにかしよう。

俺は廊下を走りながら考えていた。俺の後ろには放送終了後、すぐに放送室に詰め掛けしてきた三雲がいる。

「てめえ、そんな薄情な奴だったのかよ!」

「はっ! うるせえ、金が手に入るんだったら友達なんていくらでも売ってやるぜ!」

とんでもなく下衆な返答が来た。こいつ、本当に友達なのか?

「俺たちの友情は一万円以下だったのか!？」

「そうみたいだなあ!」

ダメだ、何を言っても止まる気配は無い。こうなったら撒くしか無いな。

俺は階段を駆け下り、昇降口に向かった。

昇降口を抜けると、文化祭にやってきた人たちが大勢いた。これから入場して、各教室を回ろうとしている人たちだ。幸い、この人たちは鬼探しについては知らない。仮に知っていても、俺が龍宮だという事は誰にもわからない。

俺はそんな人たちの中に駆け込んだ。人ごみの中に入ってしまえば一人を撒くぐらいの事は出来るだろうと言う考えだ。

「ちくしょう、あの野郎どこ行った!？」

俺の想像通り、俺を追って来ていた三雲は人ごみに紛れた俺を見失っていた。そんな中、俺は悠然と人ごみを抜けて役員棟の裏に向かった。そこならば、人が少なく一息つける。

後ろから聞こえる声を無視して役員棟の裏に向かった俺は、フェンス近くの茂みの中に隠れた。そして、考え込む。

よし、落ち着いて考えてみよう。まずは、何でこんな事になったかだ。

その答えは実に単純明快だった。会長以下二名の突発企画のせいだ。

次だ。俺はこれからどうするべきかだ。

これも実に単純明快だった。捕まる訳にはいかない。これに尽きる。捕まれば、俺の財布から諭吉さんがフライアウェイするらしい。本当は犯罪ですよ、これ。

そしてもう一つ、捕まらない事以外にも目的が出来た。

この突発企画の仕掛け人で俺を罠に嵌めた三人を捕まえて、問い詰める事だ。さつきは三雲から逃げる為に断念したが、あいつらには一度、きつく言っておかなくちゃいけないようだ。

そうなると、嫌でもここから動かないといけないな。鬼探しは文化祭終了までだが、それを待っていては会長たちに逃げられてしまう。目を跨げば会長たちを問い詰めることは難しいだろう。どうせ、めっちゃくちゃな言い訳をしてはぐらかされるに決まっている。だったら、イベント中にこっちから乗り込んでやれば良い。

でも、そうすると、校舎に入るんだよな。

校舎に入るとなれば、見つかる可能性は計り知れない。このままここで隠れているのが一番安全なんだけどな。

そもそも、会長たちはどこにいるんだ？

俺が考え込んでいると、役員棟の裏に誰かがやってきた。屋台も何も無い役員棟の裏に来る人間なんて、文化祭に興味が無いと言いなながらも文化祭にやってきた喫煙目的の不良ぐらいだと思っていたが誤算だったようだ。

「あの野郎……どこ行きやがった」

誰かと思ったら、三雲かよっ!

俺を追って、三雲が役員棟の裏に姿を現した。

「あいつの状況で行くとしたら、ここか部室棟の方しか考えられないんだけどなあ……」
あいつ、何でこういう時だけ無駄に鋭いんだよ。部室棟の方に行ってしまうえば良かったものを……

三雲の勘の鋭さに驚きながらも、俺は茂みの中で息を潜めて動かずにいた。出来る事なら、このままやり過ごすのが一番良い。

しかし、三雲はどんどん俺に近付いてくる。しらみ潰しに茂みの中を掻き分けて俺を探していた。

「ここにはいねえのかなあ……」

そう言いながらも三雲はどんどん近付いてくる。

まずい。このままじゃどう考えても見つかる。ここで見つかったら三雲から逃げるのはほぼ無理だ。どうする……

三雲が近付くにつれ、心拍数が跳ね上がっていくのが分かった。三雲との距離が数メートルになる頃には、心音が聞こえるぐらいに大きくなっていった。嫌な汗まで出てきた。何で俺がこんな思いをしなくちゃいけないんだよ。

今、三雲に見つかる前に逃げ出しても、すぐに追ってくるに違いない。こうなったら、三雲を排除するしかない。

そう考えた俺は一度だけ小さく深呼吸をして、心を落ち着けた。そして、三雲が近付いてくるのは静かに待った。

獲物が攻撃圏内に入るのをジッと待つ。野生の動物の気持ちが少しだけ分かった気がする。る。

三雲との距離が二メートル程になった瞬間。俺は茂みから飛び出て、三雲に掴みかかった。

「おらああああ!! 死にさらせえ!!」

「おわっ! ええ!」

物騒な言葉と共に襲いかかった俺に三雲は完全に反応出来ていなかった。まさか、追う側が襲われる側になっていたとは思っていなかったみたいだ。

俺は三雲の腕と体を掴んで思いつき茂みの中に投げ込んだ。すると、三雲の体が一回転して茂みの中に突っ込んでいった。

「だああああああ!! 痛ってええ!!」

茂みに突っ込んでいった三雲の叫び声を聞きながら、俺は全力でその場を離れた。

「ハハハッ! じゃあな! そこで悶絶してるんだなあ!」

「んだとお!! てめえ! 痛ってえな!」

あまりにテンションが上がり過ぎたせいか、三雲を挑発してしまった。これで完全に火が付いてしまっただろう。

大勢に狙われて、一人のトンデモ野郎に執拗に追われる。そんなゲームがあった気がする

る。今後、あの追跡者には出くわしたくないな。

役員棟の裏から離れた俺は体育館に向かった。体育館ならば、劇中に校内放送が流れない様になっているから、比較的安全なはずだ。それに、今は美月のクラスの劇がやっているはずだ。美月に色々手伝ってもらえれば、大分楽になる事は確かだ。

体育館は舞台以外の照明が落ちていて薄暗かった。これなら余程近くで確認しない限り、誰が誰だか分からない。

オペラ座の怪人の詳細を知らない俺は劇がどれほど進んでいるのか分からなかった。まあ、時間からしてまだ中盤と言ったところだろう。

俺は劇を見ずに美月を探した。美月は小道具と言っていたから、舞台袖にはいないと思う。

多分、どっかで劇を見ていると思うんだが……

薄暗い中でも知り合いぐらいなら判別が付く。それが肉親であるなら簡単だ。なんとって毎日見ているんだから。

体育館の端の方に美月の姿を見つけた俺は、なるべく目立たない様に移動した。

「美月。おい、美月」

美月の肩を叩いて、小声で話しかける。

「ん？ ああ、兄ちゃん。見に来てくれたんだ」

俺に気付いた美月が言ってくる。

「ちょっと話があるんだよ。今、大丈夫か？」

「今？ 別に問題ないよ」

もう何度も見ているのか、美月は劇に全く執着する事無く、すんなり承諾してくれた。

俺は周りの人の邪魔にならない様に——実際はあまり話の内容を聞かれないだけだが——美月を連れて体育館の入口付近に移動した。

「で、どうした？ 兄よ」

「それがだな、妹よ。今、兄は追われているのだよ」

「……………は？」

全く予想外の事だったようで、美月は目を丸くしていた。

「……………どういうこと？」

美月に事情を聞かれた俺はこれまでの経緯を話した。会長に嵌められた事やこれからやるうとしている事をだ。

「なるほどねえ。会長もすごい事したねえ」

美月は素直に感心していた。まあ、そりゃあ部外者からすれば感心してしまうだろう。俺だって追われる立場じゃなかったら、素直に感心して追う立場になっていただろうしな。

「で、私にどうしてほしいの？」

「色々手伝って欲しいんだよ。とりあえず、俺の教室から携帯を取ってきてほしいんだ

よ」

「うん、いいよ!」

笑顔で俺の望みを聞いてくれる。なんて良い妹に育ってくれたんだ。兄さんはとても感激しているよ。

「で、報酬は?」

「……………」

こいつ……

「あれ? いいの? このままじゃ捕まるのは時間の問題だよ?」

自分の立場が上だと分かるとすぐにこれだ。やっぱり、こいつ、ろくな育ち方してねえよ!

「分かった。貸し一個だ」

俺は報酬を物にするのは止めた。美月の場合、守りきった一万円で報酬を用意させそうだからだ。行動の貸しは行動で返す事にしておこう。

「オーケー、任せて。今から取ってくるから、ここにいて」

そう言っつて、美月は俺のクラスに携帯を取りに行く為に体育館から出て行った。その間、俺は劇を見る事にした。ここなら、捕まる心配もないだろ。

劇を見ながら、俺はこれからの事を考えた。

まず、携帯を手にしたら、信用出来る奴に連絡をして協力してもらおう。本当だったら三雲に連絡するところだけど、既にあいつは追跡者に成り下がっている。今現在、あいつほど信用出来ない奴はいないな。そうなると、次は……咲葉、か。咲葉なら事情を説明すれば協力してくれそうだな。事前申請があったイベントなら微妙なところだけど、申請が無いイベントなら必ず協力してくれる……はずだ。

美月と咲葉の協力を得てから、どうする? 会長たちの居場所が分からなければ下手に動かない方が良さそうだけど……

ここで俺は会長の放送を思い出した。イベントの説明をしていた時、俺を捕まえた人はどこに来るようにちゃんと説明していた。

生徒会室か……

幸い、委員会と部活の参加は強制ではないから、本校舎に比べれば役員棟と部室棟は人が少ない。案外、生徒会室に行く事は簡単かもしれない。

美月と咲葉の協力。そして、人の少ない役員棟。そう考えるとあまり悲観的になる必要も無いかもしれない。

この先の不安が和らいだ事で俺は何も考えずに劇を見始めた。舞台には仮面を付けてマントを羽織ったキャラクターがいた。おそらく、あれが怪人なんだろう。

何気なしに劇を見てみると、携帯を取りに行っていた美月が戻ってきた。

「兄ちゃん。取ってきたよ」

そう言いながら美月が携帯を渡してきた。

「クラスの奴らは何か言ってなかったか？」

教室に携帯を取りに行くと言う事は必然的に美月が俺のクラスメイトと会う事になる。そこで何か聞かれるのもごく自然な事だ。

「いや、特になにも聞かれなかったよ」

意外だった。絶対に何か聞かれると思っていた。むしろ、ここまで付いて来るとさえ思っていたぐらいなのに。まあ、聞かれなかったって事は特に興味も無いんだろう。それはそれで好都合だ。

「で、次は何するの？」

美月は更に俺の協力をしてくれるようで、次の指示を待っていた。

「そうだな。とりあえず、生徒会室まで行くのに先導してほしいんだよ」

「ほぅ、女子にエスコートをしてもらおうとは……これ如何に」

「仕方ねえだろ。下手に動けないんだから」

美月に先導してもらって、人が少ないルートで移動するしかない。無事に生徒会室に行くにはこれが一番確実な方法だ。

「あっ、だったら、変装でもする？」

名案とばかりに美月が言ってくる。確かに変装が出来れば、良いんだけど……

「……どうするんだよ」

「私のクラスは劇やってるんだよ」

舞台を指差して美月が言ってくる。

そうか。劇の衣装があったな。それならば、劇の宣伝に見られて、人目に触れても問題なさそうだ。

「もうすぐ、終わるから。それからなら衣装も借りられるよ」

「マジか!? 助かるぜ。お前、良い奴だな!」

「今頃気づいたか、タコ助」

今この場では俺に吐いた悪態なんて気にしない。それぐらいに美月の提案は良い物だった。

俺と美月は劇が終わるのを待って、舞台袖に向かった。そして、事情を説明して衣装を借りた。

クラスメイトの肉親で、尚且つ先輩だと言う事もあってか、実に協力的だった。一人ぐらい捕まえようと思う奴がいても不思議ではないのに、みんな良い奴だな。

「で、これなのか……」

変装するんだったら服だけではなく顔が隠れるものが良いと言うのは分かる。顔が知れ渡っている以上、実に理にかなっていると思う。そして、美月のクラスの劇がオペラ座の怪人だと言う事も重なって、俺は怪人姿になっていた。

「仕方ないね。これしか顔隠せないし」

「まあ、文句は言わないさ」

美月のクラスメイトに感謝を告げると、激励が返ってきた。こいつら良い奴過ぎるだろ。

「じゃあ、行こうか」

後輩たちの温かい心に感動しながら、俺は美月を先に走らせ、体育館を後にした。

「じゃあ、とりあえず、部室棟に行こうか」

「何でだよ。役員棟だよ！ 生徒会室だよ！」

美月の惚けた言葉に俺は力強く反論した。体育館から生徒会室に行くには直接、隣接している役員棟に向かう方が早いに決まっている。

「いやいや、待ちなされ。兄ちゃんは役員棟から来たんでしょ？ だったら役員棟から来る追っ手と鉢合わせになるかもしれないでしょ？」

美月の言葉であの追跡者を思い出した。茂みの中に投げ飛ばしてから、あいつの動向は全く知らない。順当に考えれば、俺を探しながら役員棟から体育館に向かって来ているだろう。うん、実に遭いたくないな。

「お前、頭良いな」

美月の頭の回転の早さに素直に驚いていた。

「ハッハッハッ。知ってる！」

「よし、じゃあ迂回して行くか」

その言葉を聞いて、美月は辺りを警戒しながら動き出した。

俺と美月は早歩きで移動していた。俺の怪人姿を周囲は宣伝と認識しているから、そんな奴が校内を走っていたら余計に目立ってしまう。目立たず、しかし、迅速に行動する為には早歩きが一番だった。

移動中、俺は携帯のアドレス帳を開いた。増援を呼ぶ為だ。

咲葉にメールを打つ。おそらく、会長の放送を聞いているだろうから、助けて欲しいとだけ書いた簡潔なメールだけで十分だろう。

一分もしない内にメールは返ってきた。その内容は俺がどこにいるかを聞いてくる内容だった。

『今は部室棟四階を本校舎に向かって移動中』

またも簡潔なメールを送る。その後、咲葉から返信は来なかったが、こっちに向かって来ていると信じよう。これで咲葉が助けじゃなくて、俺を捕まえに来たら爆笑物だけだな！

「流石に四階は人いないね」

「そりゃあ、そうだろうな」

俺と美月はお互いに、遮蔽物の無い長い廊下を眺めながら言っていた。

元々、クラスと比べて部活での団体参加が少ない為、部室棟の四階は何の出し物も無い。全て下の階に集められているからだ。

窓からグラウンドを見渡すと、すごい人だった。

屋台が所狭しと並んでいて、その隙間を埋める様に人がうごめいている。相変わらず、高校の文化祭の規模を超えている。

「この分なら誰にも会わなさそうだね」

この学校の校舎は本校舎、部室棟、役員棟と分かれているが、校舎同士は一階を除く全階がガラス張りの通路で繋がっている。一階部分は屋外に繋がっていて、グラウンドと繋がっている。中々、前衛的なデザインだ。

「そうだな。誰にも会わない事を祈るよ」

校舎同士が繋がっている事で常に四階を移動出来る。いちいち、下に降りて人目を気にして移動する事もしないで済む。

もうすぐで部室棟の端に着く時だった。もうガラス張りの渡り廊下は目と鼻の先だった。

「アーツハツハツハツハ!! そこまでだ!」

高笑いと共に俺たちの目の前の部室や階段からゾロゾロと人が出てきた。

「おいおいおい……」

廊下の先が見えなくなる程の人の壁。完全に道を塞がれてしまった。

「……待ち伏せ?」

美月の言う通り、完全に待ち伏せだ。

「たっちゃんんん。打ち獲ったりいいい」

人の壁の奥から声が聞こえてきた。それと共に壁が左右に開かれた。そして、そこには宝生がいた。

「…………宝生?」

「そうです。私が宝生です」

決まらないセリフと共にヒーローがしそうな決めポーズをした宝生。俺と美月はただそれを眺めていた。

「…………お前は何やってるんだ?」

「何って、たっちゃんを捕まえに来たんだよ?」

俺の質問が余程意外だったのか、宝生は目を丸くしていた。

「え? 何で? お前、生徒会役員じゃん」

「いやいや、生徒会役員が参加しちゃいけないなんてルールは無いよ」

「……そう言う事か。」

「なるほど、オーケー、分かった。つまり、俺を捕まえに来たんだな」

「そう言ってるじゃん」

「でも、こいつらは何だよ」

ゾロゾロと現れた総勢十名の男子。よく見たら、どいつも体育会系みたいな体つきをしている。

「この人たちはたっちゃんを捕まえる為に集めた……ハンターだよ!」

宝生の言葉を聞きながらも俺は少しずつ後ろに下がっていった。

嫌な予感しかない。まだ合図が無いから動いてないだけで、ちょっととした事でこいつら動くぞ、多分。待たせている犬がちよつとした切っ掛けで動き出す時の感じだ。

なるべく、刺激を与えない様に後退して行く。その場を動かずにいた美月の手を引いて後退して行く。

「でも、これだけいたら分け前が少な過ぎないか？」

ハンター十人と宝生で分けたら一人千円も貰えない。それじゃあ、あまりにも少なすぎる。

「報酬なんて無いよ」

「……え？」

「今期の生徒会は体育会系に人気があるんだよ。その中でも私が一番人気！」

自分で一番人気とか言っちゃってるよ、あの人。でも、確かに体育会系の部活に関する事は大体、宝生が担当しているな。あのサバサバとした性格が人気なのかもな。

「そうか。それは良かったな」

ちなみに、俺はどこかに人気があるなんて事は聞いた例が無い。悲しいなあ！ ちくし
よう!!

「じゃあ、まあ、そう言う事で……」

ヤバい、来るぞ！

「やっっておしまいっ!!」

どこかの悪の女幹部が言いそうな、コテコテのセリフを言い放った宝生。それと同時に体育会系のむさ苦しい男共が走り出した。

「やっべえ!!」

「えええ!!? ちよつと待ってよ!!」

急いで踵を返して元来た道を戻る。

やべえやべえやべえ!! すっげえ追ってくる！ 地響きが聞こえるよっ!!

部室棟が揺れてるんじゃないかと錯覚してしまう程の地響きが聞こえてくる。恐ろし過ぎて後ろを振り返る事さえ出来ない。

「もう、やだよお！ どうすんの!?!」

俺の隣りを走っている美月が嘆いている。俺だっけ嘆きたいよ！ 出来る事なら諦めた
いよ！ でも、あの男どもの波に飲み込まれるのはもつと嫌だよ!!

「ああもう！ どうすりゃいいんだよ!?!」

もうダメだ！ 何も浮かばねえ！

体育会系の連中相手じゃ走って逃げるのは不可能。体力が違い過ぎる。でも、どこかに隠れるなんて言っても、すぐに見つかる距離だ。

「どっか隠れられる場所ないか!?! あいつらが入って来れない様な場所!」

「そんな所あるわけ——— ああ!!」

美月は何かを閃いたようだった。

「あつたか!？」

「あつた! あつたあつた!!」

もう美月を信じるしかなかった。これでダメだったら、素直に諦めよう。

「ついて来て!」

そう言つて、美月は勢いよく階段を駆け降りて行く。俺も遅れずに階段を駆け降りる。もちろん、男共も階段を駆け降りてくる。数段上から床に飛び下りている様で衝撃音が次々に聞こえてくる。その内、床が抜けるんじゃないか？

「こっちこっち!」

一階まで降りた俺たちは一直線にある場所に駆け込んだ。美月に先導された場所。そこは、

「マジかよ……!」

「仕方ないよ。緊急事態だし」

女子トイレだった。

「くそっ! 流石にここに入る訳にはっ……!」

トイレの前で男共が狼狽していた。

「おお、すごいな」

男が女子トイレに入れる訳がない。というか、入ったら問題だろ。俺はほら、緊急事態だし……なんていうか……誰もいなくて良かったあ!

「ほら、行くよ」

九死に一生を得た俺は色んな意味でホッとしていた。しかし、そんな俺を横目に美月はすぐに窓から外に出ようとしていた。

俺たちが逃げ込んだトイレは部室棟の体育館側の端に位置する場所だ。窓からは体育館の側面が見える。窓から外に出してしまえば、回り込むのに多少の時間が掛かる。俺たちがその場を離れるには十分だ。

「ここにいるもどうせ宝生先輩に捕まるよ」

「あ、ああ、そうだな」

さっきから美月の行動には驚かされるばかりだ。事前の危機回避や絶体絶命だった今の状況を上手く回避出来たのは間違いなく美月のおかげだ。こいつ、実はすごいんじゃないか？

先に外に出た美月が辺りを確認して合図を出してくる。俺は合図を確認後、素早く外に出る。こんな所を誰かに見られたらお終いだ。

「よし、さっさとここから離れ——」

「……………龍宮君」

——見られたっ!?

なんでここに咲葉がいるんだ? あっ、俺が呼んだんだった。でも、いくらなんでもタ

イミダグが悪過ぎるだろ！でも、そういうや、咲葉ってあまり空気読めない奴だったんだよなあ。いや、今は別に関係ないか。それよりも、まずはこの状況を説明するのが先決だよなあ。いや、ここから離れるのが先か？早くしないと男共が回り込んで来るかもしれないしな。いや、でも流石に弁解の時間ぐらいいはあるだろ。ん？そもそも、弁解する必要あるのか？咲葉は事情を知ってる訳だし、大体、理解してるよな。……………ダメだ、あの顔はドン引きしてるよ！流石にクラスメート（男）が女子トイレから出てきたらドン引きするよな。俺だってするよ。こうなったら、何か言われる前にこっちが仕掛けてドン引きを無かった事にするしかねえよ。

「そこって、女子トイレ——」

「いやあ、良かった！今、追われててさ、咲葉に助けてもらいたかったんだよ！サンキュー！」

「……………え？」

今さっき来た咲葉にお礼言っちゃったよ。俺、テンパリ過ぎだろ…………

「ほら、兄ちゃん。こんな所にいたらまた追ってくるよ」

空気を読んでくれた美月が場の空気を変えてくれた。俺は有り難くそれに乗る事にした。

「そうだな。とりあえずは、ここから離れよう」

「え？ どういう状況？」

結果的に咲葉の中では何もかもがうやむやになったみたいだ。これなら変態の汚名を着させられないで済みそうだ。

「さあ、ほら、追われてたとは言え、女子トイレに入った兄ちゃん。行くよ」

そう言つて美月は体育館に向かって行った。

あいつ……………何でわざわざそんな事言いやがったんだよ！ 必要ないよね！？ 誰にもメリツトがねえよ！

「……………さっさと行こうぜ！」

少しばかり考えた結果、美月の言った言葉は聞き流すのが一番だと判断した。

俺は咲葉を促して、体育館に向かった。

「え？ ちょっと！」

体育館では吹奏楽部の演奏が行われていた。予期せぬ出来事で体育館に逆戻りになってしまった。

まさか、宝生まで動いているとは思わなかった。そうなると、東雲も動いていると考えるのが自然だよなあ。東雲も宝生と同様に生徒を何人か引き連れているんだろうなあ。流石に会長は生徒会室から動かない、よなあ。

三雲と宝生、そして、東雲。この三人が厄介だ。他の生徒や一般客は無視しても良いぐらいいだ。この手のイベントは知り合い特有の「加減をしなくても大丈夫」みたいな思考が一番恐ろしい。あいつらは平然と恐ろしい事をやってきそいだ。

「で、どうするかな……」

体育館の後ろの方で三人で肩を並べて吹奏楽の演奏を聞いていた。

「部室棟は宝生先輩がいるから無理だよな」

「そうになると、役員棟に直接行くしかないな。あいつには出くわしたくないけどな」

「えーっと、簡単に言うとな生徒会室に行ければ良いんだよな？」

俺たちのやるべき事を確認してくる咲葉。俺はそれに無言で頷いた。

「そっか。だったら、堂々と行けば良いんじゃない？」

「いや、それじゃ、すぐに見つかるだろ」

咲葉は何を言っているんだ？

「堂々と私たちが捕まえた様にして行けば、みんな手を出さないんじゃない？」

逃げるから追われる訳であって、捕まった風に移動すれば誰もがイベントが終わったと思っ
て、手を出さないって事か。

「良いな、それ」

「でしょ？」

咲葉の考えは名案だった。それならば案外楽に生徒会室に行けるかもしれない。

「よし、それでいこう」

俺は再び噴気し、役員棟を目指そうとした。

「だったら、もうその衣装いらないよね」

「ああ、そうだな。返しに行かないとな」

怪人のマントも仮面ももう必要ないだろう。むしろ、怪人が連行されていたら怪しいし
な。

「ほらほらあ、脱いじやいなよお」

美月が怪しい声を上げながら、俺からマントを剥いでいく。こいつ、何でこんなオヤジ
臭いんだよ。

「じゃあ、ちょっと返してくるから待ってて」

そう言っ
て美月は体育館の奥の方に行ってしまった。おそらく、まだクラスの連中が体
育館に
いるんだらう。

しばらくして美月が戻ってきた。そして、俺は体育館を出ようとした。しかし、

「ねえねえ、役員棟と部室棟の入口に体育会系の人たちが固まっていたよ」

俺の袖を引っ張って美月が言ってきた。

「マジか？　というか、どこで確認したんだ？」

俺たちがいる体育館の入口からでは部室棟も役員棟も見
る事が出来ない。ここからじゃ、
入口に人がいるなんて確認できない筈だ。

「上から見てきたの」

美月が体育館の二階部分を指差す。

体育館には二階部分が存在し、劇で使うスポットライトや体育館を区切るネットなんか

がある。そこからならば、部室棟も役員棟も見渡す事が出来る。

「あいつら……」

俺たちが体育館に逃げた事を知っていた宝生が部室棟と役員棟の入口に配置したんだろう。

役員棟の入口を塞がれてしまったては、生徒会室への最短ルートは使えない。更に部室棟の入口も塞がれている。しかし、今の俺にとってはさほど問題では無かった。

「だったら、グラウンドを通って行けば問題ないね」

咲葉の言う通り、部室棟と役員棟が使えないなら、グラウンドを使えば良い。実に簡単だ。グラウンドも俺が捕まった様に振舞っていれば、何の問題も無い。

「じゃあ、行くか」

「でも、捕まった風ってどういう事？」

再び、美月に出鼻を挫かれた。なんなの、この娘。俺が行動しようとするとかか口にするなあ。しかも、言う事がいちいち的を射ているから邪険にも出来ないよ。

「……ん、確かになあ」

一緒に歩いているだけでは、俺が捕まったかどうかの判別が付きにくい。もっと、周りから一目で分かる様にした方が良かったろうな。

「じゃあ、上着を頭から被って両手をこう前に出して歩こうか？」

美月が両手首を合わせて前に出す。

「いやいや、それってあれだろ？ テレビで見た事あるよ？ すげえ量のフラッシュ焚かれてたからね！」

犯罪者が連行される時によく見るあのポーズだ。

「ええ、連行と言えばアレでしょ」

「なんであんな辱しめを受けなくちゃいけないんだよ!？」

「恥ずかしい人だから、かなあ?」

疑問形で答えてくる美月。自分の兄を恥ずかしい人呼ばわりだよ。こいつは何でこんなにも人の神経を逆なでにするのが上手いんだろうな。

「言っちゃったよ! この娘、言っちゃいましたよ! それだけは言っちゃダメでしょ!？」

「……いや、私たちが抑えておくだけで良いんじゃないの?」

一人だけ冷静な咲葉が言ってくる。

「うん、まあそうだよな」

「まあそうだよな」

咲葉の言葉で急速に冷静になっていく俺と美月。

「よし、今度こそ行くぞ!」

「よしきた!」

「……うん!」

俺は右腕を咲葉、左腕を美月に抑えられて体育館を出た。格好よく意気込んだ割には、

実に情けない姿だ。

グラウンドに出ると、自然と注目を集めた。女子二人に腕を抑えられて歩く俺。あまり見られたくはないなあ。

「お〜お〜、見られてるねえ」

俺の左側で美月が笑いながら言っている。

「ちよつと、恥ずかしいね」

俺の右側で咲葉が少し恥ずかしそうに言っている。

「でも、こう持つてると、抑えつけてるみたいだけど——」

美月が俺の腕を背中に回して、絞め上げてくる。

「いてててて！ 痛ってえよ！」

「関節技みたいだよね。で、更に、こうすると——」

次の瞬間。美月が俺の腕に自分の両腕を絡めてきた。

「腕組んでるみたいだよね」

ああ、うん。これは腕組んでる『みたい』じゃなくて、腕組んでるね。

「咲葉先輩もやったら、兄ちゃんがモテ男みたいになるねっ」

美月が一人でそんな事を言っていると、空気を読もうと頑張った咲葉が俺の腕に自分の両腕を絡めてきた。

「え!? ちよつと——」

「よかったねえ。両手に華だね！」

美月が笑顔で俺の腕を締め上げながら言っている。

「いったたたた！ 痛てえよ！」

「兄ちゃんが鼻の下を伸ばしてるからだよ！」

俺のせいかな!? これって俺のせいなのか!? お前らがこの事態を招いたんだろ！

さらに美月が笑顔で腕を捻り始めた。

「まずいつて！ その方向はいけないでしょ！ 限界突破しちゃうよ!？」

「限界は自分で決める物じゃないんだよ！」

「この限界は俺の体が決める物だろっ!!」

ギリギリと捻り上げられた腕と俺の口から悲鳴が上がる。しかし、そんなことなど一切気にしていない様子の美月はさらに腕を捻っていく。しかし、

「見つけたぜえ！」

グラウンドで騒いでいた俺たちの視界の中に三雲がフェードインしてきた。その瞬間、咲葉が腕を離れた。少し名残惜しいが、仕方ないな。

「なんだ、お前か……」

颯爽と登場した三雲だったが、正直、どうでも良かった。

「何だとは酷いな。折角、てめえを捕まえに来たっていうのにな！」

「俺としては来てほしくなかったけどな」

出来れば会いたくなかった。

それにしても、三雲は何故かキレ気味だった。そんなにさっき、投げ飛ばしたのが頭に來てるのか？

「俺は会いたかったぜえ」

今にも俺を殺しに掛かりそうな目をしていた。こいつ、何をそんなに怒っているんだ？

「というか、お前……何だ、その羨ま光景は!？」

三雲が俺の両サイドにいる美月と咲葉を指差して言っている。

「これのどこが羨ましいんだよ……」

美月は俺の腕を捻り上げてるぞ。痛いんだよ、これ。地味にすげえ痛いんだよ。関節技は見た目が地味な方が痛いなんて聞いたことあるが、その通りな気がする。

「……お前、そりゃないだろ……」

そうか。こいつ咲葉に気があるんだったな。さっき腕組んでる所を見られたからな。そりゃあキレるわ。このままじゃ、本当に襲ってくるぞ。

「で、お前は何しに來たんだ？」

俺は三雲の意識を逸らす為に話題を元に戻した。

「ん？ おお、そうだよ！ お前を捕まえに來たんだよ！」

俺の読み通り、本来の目的を思い出したようで、三雲は俺を指差して言ってくる。

「今の俺はさっきまでの俺とはまったく違うぜ！」

何が違うのか俺には分からないが、本人が言うんだから何かが違うんだろう。でも、どうせ大した事無い変化なんだろうな。

「今の俺には強力はバックアップがついてるんだぜ！」

「は？」

三雲は一人で俺たちの目の前に立っている。そして、バックアップがついていると言っていた。つまり、見えない所にいるって事か。

「このバックアップは強力だぜえ！ もうお前を見失う事も無くなったからな」

「ちなみに、そのバックアップって誰だ？」

「何を隠そう！ 水城会長だっ！」

……………

「………マジ？」

「マジもマジ。大マジだ」

まさか、会長が來るとは思ってた。どうせ生徒会室から出られないと思っていたが、こんな形で参加してくるなんて……

「会長から俺の携帯に、お前の居場所がメールで送られてくるんだよ！」

「どういう仕組みかな？」

美月が小声で、俺と咲葉に聞こえる様に話しかけてくる。

「……GPSとか？」

それは有り得るな。最近の携帯はGPSが付いているからな。でも、それって人の携帯の場所を特定するなんて、個人で出来るのか？

俺は一応、携帯の電源を切った。これでGPSは使えない筈だ。

「他に考えられるのは……」

咲葉が顎に指を添えて考えている。

「……人、ぐらいかな？」

「人か……」

校内にいる誰かが俺たちを見たら、会長に連絡が行き、そして、三雲に連絡が入る。という連携が行われているのかもしれない。でも、もしもそうだとしたら、誰が会長に連絡を入れているのかが分からない限り、防ぎようがない。

「おい、お前ら——」

放っておいた三雲が一人でブツブツ言っている。正直、こっちはそれどころじゃない。今はまず三雲を撒かなくちゃいけない。そして、会長の目を掻い潜らなくちゃ無事では済まない。

「聞けよ！ お前ら何してんだよ！」

「何って、作戦会議だよ」

「てめえ……。ワザとやってんだろ。ああ、そうだ……。絶対、ワザとだ……」

やべえ、またやっちゃった。

俺たち三人が顔を突き合わせて話した事で、咲葉と必要以上に近付いてしまった。三雲はそれが気に食わなかったんだろう。

三雲が震え始めた。まるで火山の噴火直前の様だ。これは大噴火するぞ。やべえな……

「おい、逃げるぞ」

「……え？ でも……」

「いいから！ 今すぐだ！」

俺は美月と咲葉の手を取って走り出した。

「てめえ！ ぶち殺す!!」

……噴火しやがった。

三雲が鬼の形相で追いかけてくる。あれは捕まったら命は無いかもしれないな。

全力で逃げる俺たち、そして、全力で追ってくる三雲。グラウンドの注目を一身に浴びながら逃げる。しかし、徐々に追いつかれている。やっぱり三人で逃げるのは無理があったのかもしれない。

「どうしよう!? このままじゃ追いつかれるよ!」

「分かってるよ! そんな事言われなくても分かってるよ!」

「おら待ちやがれ! てめえだけは、もう絶対に許さねえからな!」

三雲の怒号が聞こえてくる。その距離はわずか数メートル。少しでもスピードを緩めればすぐに追いつかれてしまう距離だ。

「やべえな！ ホントにこのままじゃ捕まっちゃまうよ！」

しかし、何も策は無い。この距離では人ごみに入っても撒く事は出来ない。かと言って、スピードで振り切る事も出来ない。万事休すだ。

「私が止めるから、行って！」

俺の横から聞こえてきた声。その主は走るのを止めて、三雲を見据えていた。

「咲葉!？」

予想外の出来事に足を止めてしまう。

「ここは私が食いとめるから、龍宮君は逃げて！」

「——でも！」

「いいから！」

咲葉の目の前には暴徒と化した三雲が迫っていた。そんな所に咲葉を置き去りには出来ない。咲葉の手を握ろうとするが、それは出来なかった。

「おい、美月！」

美月が俺の手を握って走り出した。それに引つ張られる形で俺は咲葉の下を離れた。

「咲葉先輩の気持ちが無駄にしないで……」

美月が目頭を押さえて、うるんだ瞳で言っている。それを見た俺は涙をのんで頷くしかなかった。

咲葉の目の前には三雲が寸前まで迫っていた。もう、二人の衝突は避けられない。俺はそれを見届ける事無く、グラウンドを後にした。

「……………でだ、妹よ」

「どうした？ 兄よ」

体育館側の役員棟の入口に俺たちはいた。少し人目はあるが、もうこの際、気にしない。

「さっきの三文芝居は何だったんだろうな？」

「さあ？」

グラウンドで何故か芝居があった事をしてしまった。

「その場のノリってあるよね」

「何であんな事やっちゃったんだよおお！」

周りに人がいる中であんな事やっちゃった事に激しく後悔していた。

「一時のテンションに身を任せると恐ろしいよねえ」

「何でそんなに他人事のように言ったられるんだよ、お前は……」

美月は全く後悔していなさそうだった。あの場にいた美月だって、中々に恥ずかしい人だったのに。

「いや、だって他人事だし。叫んだのは兄ちゃんと咲葉先輩だけだし、咲葉先輩の言葉は案外普通だったしね」

思い返してみると、そんな気がする。

「いや、でも、俺も別に恥ずかしい事は叫んでないぞ？」

「兄ちゃんは動きがあったからねえ。私は恥ずかしい兄を見て、恥ずかしそうに引っ張る妹だったから」

ああ、納得。あの動きは無いよ。あの芝居がかった動き。なんていうか自分に酔っていたよ。顔まで作っちゃったしな！それに美月の動きもそれで納得できなくもないよ。でも、

「そんな事言ったら、お前だって泣いてただろ」

「私は手で隠してたよ」

こいつ……………

「ああそうだよ！ 恥ずかしいのは俺だけだよ！」

ちくしょう！ いつもこれだ。こいつはいつもちゃっかり逃げ道を用意してやがる！

「…………で、もういいか？」

「ああ、反省会終了だ」

俺は質問に答えて、待たせてすまないと両手を合わせた。

グラウンドから役員棟前まで来た俺たち。三雲に追われて、また体育館に戻るのはもう勘弁だったので、すぐに役員棟に来たんだ。流星にもう体育会系の男共もいないだろうと思っただ。しかし、

「いちゃったんだよなあ」

俺たちが目の前に現れた瞬間。男共は目を輝かせて襲ってきたが、俺はある提案をした。

少しだけ反省会をしたいから待ってくれ。

テンパった結果に出た言葉だったが、男共は何故か了承してくれた。完全に有利な状況になって余裕を見せつけたかったのかもしれない。なにはともあれ、反省会兼時間稼ぎに成功した俺たちは、男共が見ている中で話していた。そして、今、反省会は終わってしまった。

「美月、準備は出来たのか？」

四人の男共に四方を囲まれて、俺たちは逃げ道がなかった。普通だったら諦めるところだが、美月に策があるらしく、それを期待していた。

「もうすぐ来ると思うよ。それまで待ってれば問題ないよ」

何が来るのかは分からないが、もう少しだけ時間稼ぎが必要らしい。

「もう逃げられないからな。抵抗するなよ」

背中合わせの俺と美月に四方から詰め寄ってくる男共。

「おい、ちょっと待て」

お互いに臨戦態勢だった中で俺は不意に言葉を口にした。

「お前ら、このまま捕まえて良いのか？」

「どういう事だよ？」

俺の言葉に耳を傾けてきた男共。助かった。これでまた、多少の時間稼ぎが出来る。

「お前らは宝生の役に立ちたいんだよね？」

「まあ、そう言う事だな」

「だったら、このまま捕まえたなら、『ああ、そう』で終わっちゃうぞ」

「そんな……バカな……」

俺の言葉に男共の中に動揺が走った。そして、俺は更に畳みかける。

「ここで提案なんだけどさ。ある程度、俺が抵抗して、それを抑えつけた方が格好良くないか？」

おい、どうする？ いや、でも……などと男共が話しあっている。よし、なんとか時間稼ぎ出来ている。この間に早く来てくれ！ 何が来るのか分からないけど、早く来てくれ！

「確かに……一理あるな」

意見がまとまった様で、男共は俺の言葉を信じた。

良かったあゝ、こいつらがバカで。

「よし、どうすればいい？」

「そうだな。俺がお前達を攻め立てるから一度やられてくれ。それで、その後に不屈の精神で復活を遂げ、俺を倒す」

「なるほど。ヒーロー物の王道だな」

「よし！ 行くぞ!？」

「おう！」

やはり男子は何歳になってもヒーローに憧れる根っこの部分は変わらない。俺の口車に乗せられたとは言え、こいつらも十分楽しそうだ。

俺が男共をバツバツと倒していく。

小さい頃にやったヒーローごっこを思い出すな。体が勝手に動くよ。ほとんど打ち合わせなんて無いのに、こいつらだって十分動けている。

「ハッハッハッ。俺に勝つなぞ、百年早いわ！」

「くそ……なんて強さだ……」

「ダメだ……もう勝てねえ」

「バカ野郎！ こんな所で諦めて良いのかよ!？」

「お前……」

俺たちのやり取りを美月が遠くから見ている。その目は実に蔑んだ目だ。しかし、そんな事は気にしない。いちいち気にしたらヒーローごっこなんて出来ないからだ。

「そうだな……俺たちはまだ負けてない！」

「「おう!」」

男共が自分達を鼓舞しながら立ち上がってくる。追い詰められても立ち上がるその姿は、本当にヒーローみたいだった。

見事な連携攻撃の前に俺は追い詰めていた。もちろん、攻撃は寸止めだ。お互いに殴った振りに殴られた振りだ。

「くそっ……お前らのどこにそんな力が……」

膝をついて俺はうづくまる。ヒーローごっこはクライマックス。もうすぐで悪役である俺は止めを刺される。

「これで、止めだっ!」

俺を囲っていた男共が同時に拳を振り上げる。それにしてもこいつらすげえな。ピッタリと息の合った動きだ。

しかし、そんな時だった。「ポーンッ!」という音と共に男共の一人に何かが飛来した。「うわあっ! なんだこれ!」

飛来した物体が空中で分解し、中からネットが飛び出し、男の体を覆って拘束した。

突然の出来事に俺と男共はついて行けずにいた。しかし、美月だけは待ちわびた様な表情をしていた。

「ヒーローは遅れて現れる物です!」

そんなセリフと共に現れたのは東雲だった。手には小型のバズーカ砲の様な物を持っていて、更に同じバズーカ砲を背負っていた。察するにあれからネットを吐きだす物体が飛び出したんだろう。

「しのちゃん! グッドタイミング!」

親指を立てる美月に対して東雲も親指を立てる。

美月が言っていた援軍とはこいつの事だったのか。

「貴様! 一体何者だ!」

未だヒーローごっこを続けている男共。なんとというかノリノリだな。というか、この状況だと、お前らは完全に悪役だぞ。

「貴様らの様な者に名乗る名なぞ持ち合わせておらぬわ!」

東雲はそう言って、バズーカ砲のトリガーを引いた。

先程と同様に「ポーンッ!」という音と共に丸い物体が銃口から飛び出した。そして、一瞬にして男共を一網打尽にする。

「さあ、今の内です! 逃げましょう!」

俺と美月を促して校舎の中に入っていく東雲。

あいつもノリノリだな。もう俺を完全に置いてけぼりだよ。なんかズルイよ!

「いやあ、自分でも惚れ惚れするぐらいのタイミングでしたね」

「確かに良いタイミングだったな」

「うん、これ以上無いってタイミングだったね」

役員棟の四階を歩きながら俺たちは話していた。

役員棟も部室棟と同様に文化祭に参加する団体が少ないから、上の階は人がいない。生徒会室は三階にあるが、念のため四階を使って移動している。といっても、さっきみたい

に宝生が現れないとも限らない。おそらく、ネットで身動きを取れなくなった男共から連絡

が入っているだろうから、直に現れるはずだ。

「それにしても、それすごいな」

東雲の持っているバズーカ砲を見ながら言う。見た目はおもちゃだが、威力はさつき実証した様にすごい。

「作るのに苦労しましたからね」

「頑張ってたんだよ」

東雲が背負っていたバズーカ砲を受け取った美月が胸を張って言うってくる。どうやら、二人で作ったらしい。

「バズーカ砲の形のクラッカーを改造したんです」

紐を引っ張ると、音と装飾が飛び出すクラッカー。その大きい物にバズーカ砲の形の物がある。しかし、あれを改造するとは……

「よくやるなあ」

感心と同時に呆れてもしまう。本当にどうでも良い事に全力を出すな。今回の鬼探しだって……あれ？

「そういや、お前も一緒に俺をハメてたじゃん！」

放送室の光景が思い出される。会長と宝生と一緒にになって、東雲も俺を陥れた一人だ。

「ええ、まあ」

「何で助けに何か来たんだよ？」

俺をハメた犯人に助けられていた。何か裏がある気がしてならない。

「だって、美月ちゃんに頼まりましたから」

「……そうなのかもしれないけど……」

東雲の言葉に俺はまだ信用出来なかった。

「しのちゃんを信用してよ！ 助けてもらってその言い草は無いでしょ！」

横から美月が口を尖らせて言うってくる。確かに友人が疑われてたら気分は良くないわな。

「……わかったよ。信じるよ。どうせ、もうすぐ生徒会室だしな」

目の前の階段を下りればすぐに生徒会室だ。階段の正面にある生徒会室に入れば、こんなバカげた遊びは終わる。絶対に会長に文句言ってるやう。

階段を下りて行く俺たち。辺りに人気は無かった。これならもう誰かに邪魔される事も無い。そう思った時だった。

「兄ちゃんっ！」

俺の一步後ろを歩いていた美月の声がして振り返ると、俺にバズーカ砲の銃口を向けている東雲と美月の姿が目に入った。

「もらったああ！」

東雲の言葉と共に「ポーンッ！」と言う音、二つが重なった。

人間はある時、時間がゆっくり感じられる時があるらしいが、俺、今まさにそれだ。俺に向かって飛来する物体がハッキリ見える。そして、中からネットが飛び出す様も鮮明に

確認できた。しかし、見えただけ。体が反応できる訳がなかった。

しかし、ネットが俺に覆いかぶさる瞬間、俺は階段を踏み外して転げ落ちた。階段の途中で急に振りかえったせいだ。

廊下に倒れながら美月と東雲に顔を向ける。

「やっぱり、騙してやがったな！」

「ええ、まあ」

さっきと同じように答えてくる東雲。

「しかも、美月までかよ!？」

「別に騙してたつもりは無いよ？」

「は？」

「だって最初からのちゃんと賞金を狙ってたしね。だから、兄ちゃんが私たち以外に捕まらない様に助けてただけ」

美月がシレッと言ってくる。こいつ、とんでもねえ悪女だな！

「最初って……」

「昨日の内に話は聞いてたからね」

二人が手を合わせて仲良くしている。

「ありえなくねえ!？ お前、完全に共犯じゃねえか！」

「そうだよ。だから、これを事前に作ってたんだよ」

そう言いながら、美月がバズーカ砲をこれ見よがしに見せてくる。

「確におかしいと思ったよ。何でそんなものを作ってたのか謎過ぎたしな」

「さ、これでお終いです」

「二万円は私たちの物だねっ」

笑顔で二人が銃口を向けてくる。一発目は外れたが、二発目は無理だ。廊下に倒れ込んでいる今では避ける事も出来ない。生徒会を目の前にして、ゲームオーバーか。美月達の作戦勝ちとしか言いようがないな。

「……………くっそお〜」

諦めて捕まるしかなかった。銃口から丸い物体が向かってくる。しかし、それはまたも俺に当たる事は無かった。

鈍い音と共に体に衝撃が走る。痛ってえ！ 横腹が痛ってえ！

「ギリギリセーフだな！」

「そうだね」

廊下に広がるネット。その代わりに俺の体に覆い被さっていたのは、三雲だった。

「……………は？」

俺は訳が分からなかった。突然、押し倒されたんだぞ？ しかも、男に。訳が分からないうちに決まっている。別に俺にそんな趣味は無い。断じて無い！

「もう、早く離れてよ」

俺の上に覆い被さる三雲を引き剥がす様にしている咲葉もいた。二人が助けに来たのは分かったが、それでもいまいち状況が掴めなかった。

「えーっと、お前は何してんだ？」

俺の上から退いて立膝になった三雲に対して言う。咲葉は分かるが、こいつはさっきまで俺を追っていたはずだ。

「助けに来たんだって」

「ああ、分かった。美月たちの手柄を横取りに来たんだな」

「ちげえよ！ 助けに来たって言ってるんだろ！」

どうも信じられない。もう、軽く人間不信に陥っている気がする。誰を信じたらいいのか分からない。少なくとも、さっきまで殺してやるとか言ってた奴を簡単に信じられる訳がない。

「咲葉と話して気付いたんだよ。こんなの……間違ってる、てな」

白い歯を見せて笑顔で言ってくる三雲。

すまない、セリフが臭い上に似合っていないから、異様に格好悪いぞ。

「なるほど。咲葉の前で良い所を見せたかって事だな？」

三雲にだけ聞こえる小声で言うと、三雲は頷いてきた。

「まあ、そう言う事だ」

それなら信じられる。咲葉が絡めば三雲は真っ直ぐな男だからな。

「くそっ、また外したかあ」

「邪魔が入りましたね」

悔しがる美月と東雲が三度、銃口を向けてくる。

「おい、どうすんだよ？」

「どうしよう……」

「……どうすっかな」

「何か作戦は無いのか？」

「そんなものあるわけねえだろ」

「はあ!? なんの策も無しで突っ込んできたのかよ！」

てつきりここから脱する手があるのかとばかり思っていた。それが、何も作戦が無いと来た……

「仕方ねえだろ！ ここに来たらお前がピンチだったんだから！ 反射的に飛び込んだんだよ！」

「うわっ、使えねえ！ こんなに使えない助けっている!？」

「ほら、あまりケンカは——」

「助けてもらえただけありがたいと思え！」

咲葉の制止、美月と東雲が向けてくる銃口なんて無視して言い合いをする俺と三雲。

「ああ、もう仕方ねえな！」

俺はある手を使うしかないと考えた。それが一番確実で安全にここから逃げられる手だ。
「もういいや！ 三人まとめて確保！」

痺れを切らしてトリガーを引いた美月の言葉に反応して東雲もトリガーを引いた。反射的に俺も動く。

立膝の状態で避ける事は出来ないが、防ぐ事なら出来る。盾を使えばいい。その盾は、
「おら、出番だぞ！」

俺の近くで立膝をしていた三雲の腕と体を掴んで投げ飛ばす。

「うおおい!!」

空中で一回転した三雲は全身でネットを受け止めた。二つのネットが三雲の体に重なる。それを見た俺は咲葉の手を引いて走り出す。目指すのは生徒会室。階段付近にある生徒会室まで一気に走り切る。

「よっしゃー！ 俺の勝ちだぜえ!!」

信じられないと言った声を上げている三雲、美月、東雲を置き去りにして生徒会室のドアに手を掛ける。

「――会長!!」

ドアを開けると同時に叫んだ。会長には色々と文句があるからな。

「……………え？ なに？」

俺の突然の来訪に驚きの声上がる。お茶を飲みながら窓の外を見ていた会長が俺を見据えてくる。

「やっと来ましたよ！ 誰にも捕まらないで戻ってきましたよ！」

勝利を手に入れた事で自然と笑みが零れる。顔に喜びと怒りが同居してしまっている。自分でもよく分からない顔をしていると思う。

「……………え？ 捕まらないで？」

こいつは何を言っているんだろうと聞こえてきそうな口ぶりだ。後から生徒会室にやってきた美月と東雲も状況を上手く掴めずにいた。

誰もが、俺が捕まらずに生徒会室に入ったと思っていたのに、会長だけは違った。テーブルに湯呑を置いて、

「咲葉さんに捕まったんでしょ？」

咲葉を指差して言ってきた。

「……………え？」

俺が咲葉に捕まった？ どういう事だ？

「だから、部屋に一緒に入ってきたのは咲葉さんだから、捕まえたのも咲葉さんなんですよ？」

そうか。会長は一緒にいた咲葉が俺を捕まえたかと勘違いしているのか。なんだ、ただの早とちりか。驚かせやがって。とんだお茶目さんだぜ！

「いやいや、ちがひ――」

「そうですよ！ 兄ちゃんは咲葉先輩に捕まったんですよ！」

「そうそう。龍宮先輩は咲葉先輩に捕まっちゃった」

会長の勘違いを正そうとした言葉は美月と東雲に遮られた。

「おい、何言ってるんだ——」

「やっぱりね。では、今回のイベントの勝者は咲葉さんに決定!!」

会長は俺の言葉なんて聞く耳も持たずに話を進め始めた。

「では、これより表彰式に移ります！」

会長の言葉を皮きりに美月と東雲が動き出す。東雲は生徒会室内にある机と椅子を退かし、美月は咲葉を部屋の中央に押し出す。

「え？ いや……え？」

咲葉は慌てるだけで抗う事はせずに部屋の中央、会長の前に躍り出てしまった。

「おいおい！ ちょっと待てよ！」

会長が俺の財布から一万円を取り出す姿を見ながら、俺はそれを阻止しようとした。しかし、体はがっちりとは抑えつけられていた。美月、東雲、更に、

「くっさ、咲葉の勝ちかぁ」

いつの間にか生徒会室にやって来ていた宝生が俺を後ろから抑えつけていた。

「あっ！ お前ら！」

くそっ！ 流石に三人に抑えつけられていたら動けねえ！

三人共、一万円が貰えないと早々に見切りをつけて、すぐ様、俺への嫌がらせに移行したようだ。

「あなたは数多くの障害を乗り越え、龍宮君を捉えました。よってここに称します」

そう言いながら、会長がお手製の表彰状と裸の一万円を咲葉に手渡した。体育祭とかで優勝旗の授与の時に流れる曲を自分で口ずさみながら。

「待って！ お前ら、これはダメだろ！ 冗談抜きでダメだろ!」

咲葉は懸命に空気を読んだんだろうが、それは間違いだろ。ここは受け取っちゃダメだろ！

「今の気持ちはどうですか？」

表彰状と賞金を受け取った咲葉に向かって、会長がマイクを模した筆箱でインタビューしていた。

「えっと、よく分からないんですけど、嬉しいです！」

ダメだ。咲葉は完全に読む空気を間違えている。しかし、

「でも、これって龍宮君のお金ですよ？」

間違った空気を読んでいた咲葉が正気に戻った。

「そうよ」

「流石に私は受け取れませんよ」

「ほらあ！ やっぱりそうだよ！ 普通はそうなんだよ！」

咲葉の常識的な言葉に会長は少し困っていた。

「でも、そのお金は既にあなたにあげちゃったのよねえ……」

「ですから、貰う訳には行きません」

「だったら、俺に返し——」

俺の言葉は宝生の手によって遮られてしまった。器用に俺の体を抑えつけながら口を塞いでくる。

「じゃあ、こうしましょう。そのお金を使って、みんなで打ち上げをするの。それだったら、あなたも納得できるんじゃない？」

「え？ いや、だから、このお金は龍宮君の物なんじゃ……」

咲葉の態度は変わらずにいた。しかし、そんな咲葉の態度に会長が引きさがる訳も無く、腕を組んで少し考えていた。すると、すぐに何かを閃いたようだった。

「ねえ、龍宮。私たち生徒会の役割は何だと思う？」

会長は拘束されている俺の前にやって来て宝生に口枷を外す様に指示し、質問してきた。一体、何なんだ？

「えーっと、生徒たちの代表で、生徒が過ごしやすい学校を作る事、ですかね？」

質問の意図が分からないまま、俺はそれらしい事を答えてみた。

「そうね。それも正解。でもね、生徒会って言うのは学校行事の運営をしたり、雑務をこなしているだけじゃダメなのよ。生徒の思い出作り。これも重要な仕事よ。友達との思い出も良いけど、この学校に入って良かったと思える思い出があったら嬉しいでしょ？」

会長は微笑みを浮かべながら言っている。まるでこの言葉が本心の様に。

「……………確かに、そうですね」

いつも思い付きで行き当たりばつたりの言動が目立つが本当はこんな事を考えていたのか、そう思うと感動してしまった。

「今回のイベントだって、みんなで楽しめたでしょ？ あなたたちだけじゃなく、生徒たちも。直接、龍宮を追わなくても、いつもと違った文化祭を楽しめたはずよ」

会長の言う通り、このイベントのおかげで俺自身も文化祭を楽しんでいたのかもしれない。執拗に追ってくる体育会系の男共、衣装を貸してくれた美月のクラスメイト。例年通りの文化祭だったら、決して接する事も無く終わっていただろう。

「だからね、少しのお金なんて小さい事を気にするのは止めなさい。龍宮、あなたはそれ以上に掛け替えの無いものを手に入れたんだから」

目を潤ませて言っている会長の姿を見て、目頭が熱くなった。そして、

「……………はい」

自然と言葉が出てきた。金がどうかそんな事は本当に小さかったのかもしれない。

「はい。龍宮から承諾を得たわ。じゃあ、打ち上げに行きましょう」

会長が咲葉から一万円を受け取り、悠々と言っている。さっきまでの感動的な雰囲気なんてどこかに消え去っていた。

「やったー！ おごりだあ！」

「でも、どこでやるんですか？」

「やっぱりカラオケとかじゃない？」

美月と東雲と宝生が俺の体から手を離し、生徒会室を出て行く。

「さっ、行くわよ」

会長は自分の鞆を持って、生徒会室を出て行く。

俺は美月と東雲と宝生に引きずられながら生徒会室を出る。咲葉も釣られる様にフラフラとついてきた。

「え？ その打ち上げの金って……」

さっきの会長の言葉は何だったんだろうか？ そんな事が頭の中を駆け巡っている。あれは嘘だったのか？

「龍宮、そんな小さい事言ってるんじゃないわよ。さっさと行くわよ。さっき自分で一万円はいらなくて言ったじゃない」

「……そう、ですけど——」

「自分の言葉には責任を持ちなさいっ！」

会長は俺の言葉を遮って一喝してきた。有無を言わさない迫力だ。

もうダメだ。もうあの一万円は返ってこない。何でこんな事になったんだ？ 会長の言葉、文化祭が終わる独特の哀愁漂う雰囲気、全ての要素が絡み合った結果だ。

自然と足が崩れてしまう。膝をつき、掌をついて廊下に崩れ落ちてしまう。

「じゃあ、私たちは先に行ってるから、後から来なさいよ」

廊下で崩れ落ちている俺に対して会長が声高らかに言ってくる。全く悪びれていない。

美月と東雲と宝生が唯一の良心である咲葉を強制連行していく。なんだ、あの悪女の集団は……

そんな時、文化祭の終了を告げる放送が流れた。耳に入る放送は文化祭が終わる事を嫌でも認識させる。それが無性に悲しくて、少しだけ泣きそうになった。

「……………」

廊下に取り残された俺。そのすぐ近くにはネットに覆われた三雲が転がっていた。俺は無意識の内に這って近付いて行った。

「なんだよ、あいつら……」

「お前もついてなかったな」

「お前もな……」

「……ネット、取ってくれないか？」

「……ああ、いいぞ」

「……………」

「なあ、半額は俺が出そうか？」

「……ハハハ、お前良い奴だな。サンキュ……」

「……気にすんな。親友だろ？」

その後、俺たちは廊下で二人して力なく笑い合った。



後日、文化祭の後片付けも終わり、いつもと変わらない日常に戻った学校。生徒会もいつも通りに戻った。

「次の会報で何か載せる事ってある？」

会長がペンを回しながら言っている。

「会報ねえ。最近は特に目立った活動もしてないからねえ」

宝生が椅子の背もたれに体重を掛けながら伸びをして行っている。

「そうですね。正直、何も載せる事無いですよ」

東雲も半ば諦めながら、頬杖をつきながら言っている。

「いや、そんな訳——」

「いっそのことある事無い事、載せてやろうかしら」

「流石にそれは怒られるって」

「この前も怒られたばかりですからね。ちょっとインターバルが短い気がしますよね」

「そうなのよね。そうになると、本当に書く事がないわ……」

頭を抱えて、本気で悩みだした会長。しかし、俺はそんな会長の思案を遮った。

「何やってんだあ！ デジャブだよ！ 前にも同じ事があったよ!!」

「……もう、何よ」

鬱陶しそうに俺の見てくる会長。一体、いつまで続ける気なんだよ。

「文化祭の事を載せれば良いでしょ!?! 色々あったでしょ!?!」

俺の言葉に三人共、数日前の出来事に記憶を巡らせている。

「ああ、たっちゃんの——」

「諭吉さんが——」

「フライアウェイ!」

宝生、東雲、会長の順に息の合った事を言ってくる。

「そうだけど！ それもあつたけど、他にもあつたでしょお!!? ちなみにまだ許してねえ

からな!」

「え？ 実行委員会に怒られた事？」

「そこは載せない方が良いでしょう！ 載せるにしてもオブラートに包もうぜ!」

文化祭後、俺たち生徒会は実行委員会に怒られた。もちろん、申請の無いイベントを勝手にやったからだ。それに勝手に放送室まで使ったんだ。怒られて当たり前だ。

「文化祭の様子を撮ったりしたでしょ!?! それを使えばいいんだよ!」

「……………え？ 写真?」

俺の言葉に目を丸くする会長。

「写真なんか、誰か撮ってたの？」

全員の顔を見渡しながら宝生が言っている。

「私は撮ってませんよ？」

東雲が首を横に振りながら言っている。

「マジで？」

誰も写真を撮っていなかった事に今さら気付いた俺たち。

「私は基本的に生徒会室と各クラスを行き来してたから写真なんか撮る余裕は無いわよ」

「あたしはたっちゃんを、遊びながら追ってたからそんな余裕は無かったよ」

「私だってクラスの劇とか友達のクラスに行ったりしながら、龍宮先輩と合流したから余裕はありませんでした」

「俺だっつてずっと追われてたから、そんな余裕は無かったぞ」

全員が自分の責任にならない様に言い訳をしている。しかし、全員が全員、正当な理由が無い。というか、普通に文化祭を楽しんでいて忘れていただけだ。

「……冗談抜きでマズいんじゃないんですか？」

「……………そうだね」

「どうするかな……」

頭を抱えて悩む俺たち。しかし、こんな状況でも慌てず、落ち着いて物事を考えていた会長は何かを閃いたようだった。

「……よし！ 写真部から文化祭の写真を奪うわよ!!」

会長が椅子から飛び上がり大声を上げた。

「えっ!? ちょっとそれは——」

「それだあ!!」

「それしかありませんね!!」

俺の言葉なんて一瞬でかき消して、宝生と東雲も椅子から飛び上がり、賛同していた。自分たちのミスを消せるのであれば、何だっつてやると言う様な勢いだ。

「じゃあ、今から写真部に奇襲を掛けるわよ！ ついてきなさいっ！」

「りようかい——」

生徒会室のドアが壊れるんじゃないかと思うぐらいに勢いよく開け、会長以下二名は写真部に向けて進軍して行った。



やっぱり我が校の生徒会はおかしい。相変わらず変人ばかりで、やる事なす事、型に嵌らない。嵌る気が無いんだ。そんな変人役員に囲まれた俺はやっぱり学校一大変なポジションにいる。どうせ、この後も怒られるんだろう。俺の責任にされて。

でも、大変だろうが、怒られようが、やっぱりこの生徒会は面白いと思う。あまり認めたくは無いが、今の生徒会役員は学校の歴史上、一番面白いと思う。

でも、変人たちを擁護したからって、俺は変人では無い。断じて違う！ そう思っている。